岡山大学大学院　教育学研究科　教育科学専攻
令和４年度　美術教育講座論文発表会

令和５年２月 20 日
22M21003　森脇　咲子
主指導教員　赤木　里香子教授
副指導教員　清田　哲男教授
副指導教員　山口　健二教授
最終審査副査　大橋　功教授

美術系大学・学部における芸術と学問の関係について
―戦後の油絵に関する学科を中心に―

章立て

はじめに
　本研究の動機と目的
序章　美大の何が近年問題とされているのか
　第１節　美大に対する近年の当事者の問題意識　第２節　先行研究の検討　第３節　本研究の立場
第１章　戦後の美大の概況
　第１節　専門美術教育機関の新制大学化　第２節　美大における大学紛争
　第３節　大学紛争後の美大
第２章　当事者及び美術関係者の美大に対する問題意識
　第１節　1940 年代後半～1950 年代　第２節　1960 年代　第３節　1970 年代
第３章　美大で指向されてきた価値観とそれを支えてきた芸術と学問の関係
　第１節　美大における個別性と一般性　第２節　美大・美術学校の構想を担った中心人物たちの特徴
　第３節　美大における個別性の強さをもたらす芸術と学問の関係
終章　美大において一般性を指向できる芸術と学問の関係の提案
　第１節　一般的な大学問題を手掛かりに　第２節　「作者」であることにまつわる問題を手掛かりに
　第３節　日本大衆文化論における芸術と学問の関係
おわりに
　今後の課題と展望
参考文献一覧/以上、全 227 頁
付録（各章の補足として美大の教員の在職期間や略歴、教育課程などを記したもの）/別冊、全 60 頁

本研究の成果

本研究では、研究目的⑴美術系大学・学部（以下、美大）[1]の教員や学生といった当事者の一部が美大に対して世代を越えて問題意識を持ち続けてきた原因を明らかにすることと、⑵その問題意識を解消する手立てを当事者に向けて提案することを、油絵に関する学科を中心にした各種文献調査と大学研究の参照に

[1] 本研究では、美術系大学・学部（美大）を作家・専門家養成を目的とする美術やデザインなどに関わる学部や学科を持つ大学・学部とする。美術教員の養成を目的とする教員養成大学・学部は含まないこととする。今回の研究対象の美大は、京都市立芸術大学美術学部、東京藝術大学美術学部、女子美術大学、日本大学芸術学部、武蔵野美術大学、多摩美術大学の６大学である（創立順、現在名）。

よって進めた。そして次のような成果があった。

・目的⑴について（第 1 章～第 3 章）

まず、目的⑴に応じるために、第 1 章では新制大学化や大学紛争といった高等教育機関の制度的変化のあった 1940 年代後半から 1970 年頃までの範囲で、主に年史を用いて戦後の美大の概況を把握した。研究対象の 6 つの美大では、戦前に引き続き実技実習を中心に作家・専門家養成を行いつつ、一般的な大学と同様に新制大学として順調にスタートしたかに見えた。しかし 1960 年代末に女子美術大学以外で大学紛争が起きた。そこでは、芸術系の大学が教育・研究の場として成立するのかということや、美大では時代錯誤な芸術や学問が再生産されているだけではないのかといった美大側や学生の声があった。そのため、紛争時には美大が実技を有する大学であることで生じる何らかの問題が表面化したことが分かった。

第 2 章では、美大が長年持ち続けたこの問題を、上記の時代範囲における各種文献資料に見られた当事者及び美術関係者の美大に対する問題意識を表明する言説から把握した。彼らの言説で特徴的であったのは、美大の指導体制をめぐる発想の違いによる意見の噛み合わなさであった。主に美大の教員はそこで養成すべき存在である作家から指導体制を発想した。油絵分野の場合、対象の観察に基づく客観的な描写を通して、美術史や美術批評で評価された作家のような美的な主観の表現が目指された。そして、美大における学びは学生の自発的な芸術や作家への理解にあることや、石膏像や人物、静物などを油絵や木炭などで描写するという作品制作に関する技術的体系から学校らしさが形成されることが考えられていた。一方、一部の教員や学生、一般大学の教員、美術雑誌記者は、美大は一つの大学であると発想し、作家を起点に発想された指導体制を戦後当初から批判していた。具体的には、この発想では学生の創造活動が作家の個人的な体験に終始してしまい、それだけでは得られない部分について保障されないということであった。本研究はこのことが大学紛争で表面化した美大の長年の問題と考えた。

一般的に大学は「学問の府」と称されるように、学問という合理的で客観的な知識の体系を伝達・追究し、対象に共通の性質である一般性を指向しているが、美大では作家の感性や内面といった個別性が長年指向されてきた。それとは別に実際には、作家の個人的な体験に留まらない創造活動によって、何らかの知的な体系を求める当事者の受け皿となるような指導も 1960 年代以降の美大で摸索されてはいた。しかし、これは作家の個別性を重視する指導体制に対する途切れ途切れの傍流であり続けた。第 3 章では、これらの原因として、美大（美術学校）の設立が文部省や自治体に認可される前の構想段階の中心にいた、大学出身者の存在を見出した。彼らの多くは美大（美術学校）設立後に学科担当教員となったり、学長（校長）や理事長、学部長など大学（学校）の中心的な役職に就いたりした。彼らの多くは大学で哲学や美学、美術史といった芸術に関する学問を学んでいた。これらの学問にも他の学問と同じく、近代において一般性を指向しながら全体との連関から離れて細分化する傾向があった。細分化する学問にとって芸術は、学問と芸術の総称である「学」や「芸」、「術」、「学芸」といった一体的なものではなく、一種の現象として分析の対象となった。そのような学問から抽象される芸術には作家の個別性も含まれた。大学出身者の彼らにも構想段階において作家志向の指導体制の発想があったことを踏まえると、美大の教員や学生といった当事者の一部が美大に対する問題意識を世代を越えて持ち続けた原因は、美大では芸術の主体の一般性を求める側面が学問の細分化によって捨象されてきたことと考えられた。

・目的⑵について（終章）

終章では、美大もまた大学であるという発想から、目的⑵として当事者が一般性を指向できる芸術と学問の関係を提案することにした。このとき、芸術は個別性を指向する作家に限定されない存在によってなされるもの、学問は必ずしも細分化を目指さないものと捉えた。そしてこれらを明確化するために日本や

欧米の大学研究を参照した。日本の大学研究からは、美大における作家志向は日本の大学では専門的な知識が必ずしも大学の中で統合されないまま発展してきたことの反映であると考えられた。欧米の大学研究からは、近代の大学が一般教育との調和を図りながら専門職教育と研究を行う中で、必ずしも明確な職業意識を持たない学生から「大学が総合的かつ知的一貫性をもった実存的に意義のある視野を与えてくれること」[2]が求められてきたことが分かった。

そこで本研究は、美大の一部の当事者が求めた一般性を芸術の主体に必要な「知的一貫性」と捉え、日本大衆文化論における芸術と学問の関係を提案した。日本大衆文化論とは、「『データベース』『世界』『教養』といった呼ばれ方をする情報の坩堝から人々がなにがしかの破片をとり出して、趣向を凝らし、組み合わせて何かを語り／つくる」[3]という様々な文芸の創作の基本に関わる「大衆」の営み（大衆文化）の一部を取り上げ、そこから「多様な領域に援用可能な枠組みを提示する論考」[4]である。日本大衆文化論における芸術は、人々に共通する知識や出来事である「世界」を参照し、これらの中から自身が特に着目する要素である「趣向」を以て、他者と共有できる知識や出来事を生成する不特定多数の「作者」の創作である。「大衆」とは「作者」の群れである。よって、これまでの美大で考えられてきた場合よりも、また明治期に導入された制度としての「美術」よりも、芸術の主体を広く捉えることができる。そして学問はその担い手の意志を社会の中で貫徹するという運動としての側面を持つ。そのため日本の大学にあまり見られなかった横の流動性がある。

運動としての学問は、日本大衆文化論の論者である柳田國男（1875-1962）の場合、柳田の興した民俗学やその成果にあたる。柳田にとってこれらは、日本の大学や学術研究者の中だけに蓄えられるものではなく、多くの人々に参照されることで社会変革や各自の苦しみを救うことを可能にするものであった。学問の担い手が社会の中で流動的であることを求める声は、一般大学の教員であり、同じくこの論考の論者でもある社会学者の加藤秀俊（1930-）にも見られた。このように運動としての学問は、近代社会に見られる「支配する者の側から徹底的に透明化して、最も合理的な管理体制をつくっていこうとする動き」[5]によって「黙殺され、抹殺された意味の諸次元を取り戻す」[6]という人間の総体化（totalization）の動きに連なる客観的な知識の体系といえる。本研究も美大の当事者の方向性を総体的に捉える試みという意味で、この動きの一例に位置づけられるだろう。

一つの社会組織の中で、その組織ないし当事者の持ついくつかの側面が捨象されてきたことで何らかの問題が生じる場合、これらを総体的に捉え直す試みは高等教育の発想に偏りのあった美大に限らず芸術や学問の創造に関わる様々な場面において必要とされるのではないか。

---

[2] ジョセフ・ベン＝デビッド、天城勲訳『学問の府』株式会社サイマル出版会、1982 年、266 頁。

[3] 大塚英志「あとがき」、日文研大衆文化研究プロジェクト編『日本大衆文化論アンソロジー』株式会社太田出版、2021 年、316 頁。

[4] 同書、315 頁。

[5] 見田宗介「現代人の社会意識」、竹内啓編『東京大学教養講座 2　学問における価値と目的』財団法人東京大学出版会、1980 年、320 頁。

[6] 同書、320 頁。